

# 医者も知らない 平穏死



連載③

△長尾和宏△長尾ク  
リニック院長。日本  
尊厳死協会副理事  
長。著書に「平穏  
死」10の条件」など。

老衰に加えて、慢性腎不全、慢性心不全の急激な悪化を併発したSさん(90)は、このままだと余命数日という状況でした。

死なないためには、入院して全身状態を改善し、人工透析を始めるしかありません。しかしSさんは、断固拒否。

「自然にこの世を去ってほしい。延命治療になるようなことはすべて拒否したい」

Sさんの強い意志を聞き、ご家族の気持ちは、揺



(写真はイメージ)

## 親が延命治療を拒否したら…

れに揺れていました。

入院した場合どのような処置が行われるのかを、私はご家族に説明しました。

ICU的な管理のもと、点滴で治療薬を投与し、人工透析も行。患者さんが嫌がって暴れたら、麻酔薬で寝てもらおう可能性もある――と。

「これで全身状態が少し持ち直す可能性があります  
が、確率は高くはありません

ん。人工透析など、Sさんが嫌がっていることもしなくてはなりません。うまくいってご自宅に戻れても、人工透析は簡単に中止できません。しかし、このままでは、危機を乗り越えられない可能性はほぼ0%でしょう。入院すれば0%ではない。入院しますか? それとも、Sさんのご希望通り、自宅で自然な最期を待ちますか?」

集まった10人ほどのご家族は、皆さん、泣いておられました。Sさんをどう見送るか、これまでに何度も考えてきたのでしょうか。30

分ほど話し合われ、長男さんが静かに言いました。「このまま、自宅です……」  
私はSさんに「延命治療をしないで、本当にいいのですか?」と尋ねました。すると、「それでいいのです。ありがとうございます」とかすかな声で答えられました。

旅立つまでの1週間は、穏やかで、そして賑やかなものでした。ウトウト眠るSさんの隣を、笑いながら走り回るひ孫さんたち。息子さんと娘さん、お孫さんたちがSさんに話しかけている姿も、何度も見かけました。最期は、多くの親類縁者に見守られて、息を引き取られました。(火曜掲載)